

石瀬監督を信じて勝ち得た勝利

第44期 山縣晴夫

昭和62年春、石瀬監督二年目のシーズンが始まるうとしていた時、千歳高校ラグビー部44期生は、町田市にある玉川学園の敷地内にあるグラウンドに立っていた。今年には部にとって、また監督にとっても一回戦で敗れた秋の大会から新3年生が多いチームで多少なりとも結果を出さなければならない年であった。

対戦相手は都立武蔵村山東高校、都立の中では名の通った相手であった。監督はよく選手に「いい選手を集められる私立は仕方ないとしても都立には勝とう」と言っていた。少しぬかるんだグラウンドコンディションの中、体の大きい相手に千歳は苦戦。特にセットプレーで劣勢を強いられる。スクラム、ラインアウトは完全に支配され、結果的には0対18で完封負けを喫した。何がいけないのか全くわからずに終わってしまった試合であった。呆然とする15人に追い打ちをかける様に、BKの要であった郷司の口から「アメリカに留学することになったので、秋の大会に出ることができない」と伝えられた。一年生の時から一本目だった郷司の離脱はチームにとってさらに打撃となった。

体も小さく、さしたる取得もないチームをどう強くするか、監督は悩み抜いたに違いない。だが我々は、石瀬監督を信じてついて行けば秋は絶対に勝てる、そう互いに問いかけながら練習に励んだ。

当時の練習は走ることが中心であった。長距離のランパス、回転式のヘッドダッシュ、FW・BK個々の練習の後のオープン練習と走り詰めだった。以前までのようにポイントの移動で歩くことはなくなった。走るだけでなくウェイトトレーニングにも取り組んでいた。不幸にもこの年、母校のグラウンドが長期の改修工事を行うことになり、都立

千歳ヶ丘高校グラウンドや多摩川の河川敷、夏合宿後にはOBの取りはからいで丸紅グラウンドでも練習を行った。

夏合宿は山中湖で行った。練習の第一日目は、ただの荒地のようなグラウンドの石拾いから始まった。ゴールポストさえなかった。夏合宿は例年にも増して、OBの方々の参加が多く、厳しい指導や練習の相手になって頂いた。合宿終盤で都立富士という耳慣れないチームと試合が組まれた。試合前の練習を見た感じでは相手との体格は互角だった。が、結果は無惨ともいべき惨敗だった。疲労のピークにあったとはいえ、ひどい敗戦だった。通常、負け試合の後、走り込みがあったが、この日はそれさえもなく、監督もショックを隠しきれない様子だった。

チームに変化が現われたのは合宿後だった。監督よりポジションの変更が告げられた。3番を務めていた石崎が減量したことにより走力が増し、突破力もあったのでNo8に廻し、チームのパワーを持つ大川原を1番から3番へ、そしてNo8だった山縣をCTBへとコンバートした。当初は各自が戸惑いを見せていたが、秋が近づくにつれ、序々に歯車が噛み合うようになってきた。

そして迎えた秋の大会、クジ運よく二回戦から出場の千歳の相手は、まだ創部間もない都立水元高校。場所は葛西工業高校グラウンドだった。前日の練習後、薄暗い多摩川沿いのグラウンドでジャージが監督から渡された時、全員に気迫が漲っていた。OBや在校生が大勢見守るなか試合は始まった。持久力に優れラインアウトのスペシャリストの高橋、スピードとタックルが持ち味のFWリーダー須賀の両フランカー、切れ味鋭いCTB川嶋、パワフルな両WTB小林、村田のトライや活躍で相手を圧倒し、56対0で勝利した。三回戦は私立聖学院高校。千歳

FWは固いモールと集散で体格的に優る相手を上回り、SO前畑の絶妙なキックと状況判断で相手をゴール前に釘付けにした。そして前半、ポイント中央スクラムからブラインドに展開、CTB山縣からライン参加したFB赤根が飛び込みトライ。後半、相手22m付近右スクラムからFBライン参加で赤根が抜け、山縣へとつなぎ、そのままFWの

素早い集まりで押し込みトライ。結果10対3で勝利した。44期生にとってベストゲームとも言える素晴らしい試合であった。その後四回戦では、奇しくも千歳OBの水谷氏率いる都立秋川高校に敗れた。監督を信じ、逆に監督の期待に答えることができ、我々44期にとって最高のシーズンであった。

○第67回全国高等学校ラグビーフットボール大会東京都予選
昭和62年度全国高等学校総合体育大会東京都予選

